

## 老若男女共同参画社会の子育てを見通す(7)

— 近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同 —

競争社会における弱者こそ人間らしい社会づくりへの旗手

金田 利子

はじめに

この連載も隔月で一年余今回で一応の終結となる。  
連載の期間中に起こったあまりにも厳しい青少年自  
身の出来事や、親や養育すべき側の「子殺し」も含め  
た虐待などの報道に接するにつけ、一回目に取り上げ  
た「近代化の行き詰まりの問題」が、ここまできてし

まったのかと、社会の完全な崩壊さえ予感され、心を  
痛めつつ実感している。そして子育ての共同は、支え  
合う取り組みが近代化の行き詰まりの打開への道(競  
争社会から共同社会へ)につながり、社会崩壊をくい  
とめる力になるのではないかという思いを強くしてい  
る。言い換えれば、個々人の生活レベルでの困難への  
支援への取り組みが、むしろ病んだ社会の治療を支援

する大きな力につながっていくのではないかと、またそうなる可能性を孕んでいるのではないかと。

本連載では、子育ての共同は、こうした可能性を自覚し、その方向をめざしてこそ意味を持つのではないかと、という一回目の基調提案をもとに、二回目以降、いくつかの角度から何人かの方々に協力執筆を頂いた。

そこで最終回にあたる今回は、近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同とは何かを、これまでの連載をふまえてもう一度確かめておきたい。また、子育ての共同を推進するための専門職は必要なのか、また、どこでどう養成するのかについて追記するとともに、最後に子育てを担う未来の市民育成について触れる。

### 近代化の行き詰まりとしての生きにくさ

近代化とその行き詰まりの私自身の捉え方の詳細については、一回目（一九九九年十一月号）に述べているので省略し、ここでは、今日それがどんなふうに表示されているかを中心に言及する。ここで近代化の行き詰

まりとは極くかいつまんで言えば、十八世紀末の産業革命以来二世紀余りにわたって、世界は工業中心に発展し、合理的に効率的に動いてきた。そうしたなかで、男女の分業思想を前提とし、競争原理を基本として、高齢者や障害者など弱者を排除して効率第一主義的にすすめられていく方向が進行し、その歪みが大きくなり、人間自身の破滅につながりかねない状況をいう。

社会学者の森真一氏は、氏の著書『自己コントロールの檻―感情マネジメント社会の現実―』（講談社二〇〇〇年）の中で、こうした今日の新たな合理化の状況を、アメリカのG・リッツァーの使い始めたもので、社会学の事典にも記載されているという「社会のマクドナルド化」という用語をもとに、解説している。この解説は確かに、如何に今日の社会が病んでいるか、私たちの生きにくさがどこからきているかをよく言いあてており、これとの対比において捉えると子育ての共同の方向を考えやすい。そこで、筆者の理解

したところを要約しておきたい（一）は筆者の追加）。

それは、マクドナルドに代表されるファーストフード・モデルであり、「効率性」「計算可能性」「予測可能性」「テクノロジによるコントロール」という相互に関連する四つの次元の基本原理からなっている。

第一の「効率性」では、（レジ用機Ⅱ受け付け従業員数に合わせた数の列に）並んで商品を手に入れ、食べて片付けて店を出るまでが（全自動的に）客と従業員の行為が無駄なく流れるように工夫されている。

第二の「計算可能性」では、質的なものを数値に置き換えるという特徴がみられる。値段の差以上に量の多そうな「ビックマック」を買うと得したような気にさせる。従業員の労働、商品の提供の速さ、商品の大きさや重さなど、すべてが数量化されている。

第三の「予測可能性」では、商品がマニュアル化されているため、特別にうまくもまずくもないがどの店でどのメニューを選んで「あの味」という予測が可能になっている。（没個性を意味すると言えよう）。

第四の「テクノロジによるコントロール」では、ここでのテクノロジは、機械や道具だけをいうのではなく、スキル、知識、ルール、規制、手続き、マニュアルが含まれているという。機械化されたキッチンシステムやマニュアルが、製品、従業員、客を、経営者の期待どおりにコントロールすることをいう。

こうした流れに乗っている限りにおいて、今日の社会は生きやすいのであるが、この流れに則せない者は、速度が遅く予測を不可能にして列を乱す「困りもの」になり、大人も子どもも生きにくくなる。それゆえ、個人もマクドナルド化していこうとする機制が働く。

それに応えるのが、今日普及され始めている心理学的に開発された「感情の知能」(EQ)だと森氏は批判的に分析する。この能力は、生きにくさにこだわるのではなく、自己の感情を社会に合わせて調整できる能力(EQ)を高め、個人の側をもマクドナルド化して今日の社会に順応する人の育成に役立っていくという。

また、マクドナルドの「成功」のもう一つの効率化

の要因として、従業員の非正社員（パート・アルバイト）化をあげている。そして、社会全体が一つの大きなマクドナルドの店舗のようになりつつあり、「能力主義」や「雇用流動化」が進行している。しかも、新しい合理化には、その不満の解消と積極的適応の上で感情のマネジメントを導入し、人々は、経営者・為政者の望む方向への「自己コントロール」を余儀なくされていくという（書名の由来もここにみられる）。

### マクドナルド化社会における

#### 福祉・教育行政の根本的な問題

前述のように社会全体がマクドナルド化していく中で、どうしてもそれに乗りたくても乗れない「困った」人たちがいる。それが「社会的弱者」である。機械化された切符売場や改札口でモタモタせざるをえない類の人たちである。それは、高齢者・障害者・その国の言葉に不自由な外国人・幼い子どもそして子連れの親などである。こうした人たちが「困った人」とし

てではなく、その人権が保障されるように支えるのが、マクドナルド化に象徴される資本主義社会の歪みを修正していく社会福祉行政の課題だといえる。

したがって、福祉は、戦争社会における「赤十字」のように、マクドナルド化社会においてもマクドナルド化を許容してはならない、近代社会の道義であり、競争社会において競争を是としてはならない歯止めではないか。もしそれがなければ競争はエスカレートし、資本主義社会の「道徳」は不毛になり、人間社会は崩壊していく。誰も崩壊を望まないであろうにもかかわらず、今日、政府のすすめる社会福祉基礎構造改革では、規制緩和をし、もともと対等な市民の間で行われた自由契約による競争の論理による市場原理を「自己決定・自己責任」の名のもとに、「社会的弱者」の人権保障にかかわる福祉の世界にまで取り入れていくうとしている。これを根本的な矛盾の一つと考える。

この矛盾の露呈したのが、まさにベビーホテルにおける乳幼児虐待死などの姿ではないかと言えよう。

また、自由競争を原理とする資本主義社会にあつてもマクドナルド化を意識的に排除することを社会的ルールとして確立させなければ、社会の存続さえ危ぶまれる事態になることを示しているもう一つ側面が、発達の考慮である。成長・発達の途上にある子どもの保育・教育に競争の論理は矛盾する。

発達には、活動の方向が外に向くときと内に向くときがあるが、後者の場合にはナイーブになる。日常的な行動面では適応できても、内面的にみたとき、もつとも「価値」志向性が高まる思春期―昨今の青少年問題の焦点になっている時期―がそれにあたる。今日の教育行政は、そんなことはおかまいなしに一律にいやむしろ中学校の時期にもつとも厳しく口では「一人一人が大事」と言いながら、マクドナルド化の最たる姿である質を数値に置き換える偏差値教育を進めている。思春期だからこそ、いつそう、それに乗れないにもかかわらず、思春期の最中に高校受験のための順列がつき、しかも内申書という形で人格までもが点数化

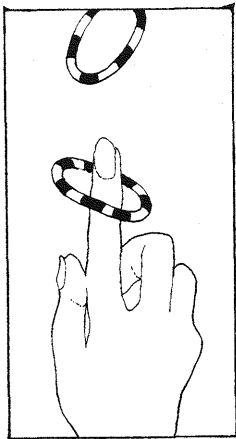
される。

次の詩は、そのことを如実に物語っている。

ぼくの見た夢 中三・氏名不明

大きな商店の店先にぼくは並べられていた／ぼくもぼくのまわりの商品もみんな値段がつけられてい／それは偏差値である／お客（高等学校）は、数値の高いものから買っていく／ぼくは売れ残っている／なかなか売れない／店先では売り子（教師）が品物をふいたり並べたりしていた

（都筑学「中学生は自分の将来をどのように考えているのか」横山・高垣・吉野編著『中学生の発達と教育』三和書房 一九八四年）



こうした、大人たちのつくる社会の矛盾を、言葉で書くことなど、表現の手段を多く持っている場合はよいが、その教育もされていない場合、自傷行為か、反社会的な行動で抗議することになる。後者の場合が十六・十七歳少年の問題につながるのではないだろうか。

マクドナルド化された社会は、人間らしい社会とは呼べないが、競争社会を採るのであれば、社会的弱者や発達のナイーブ期にある人々には考慮するのが、社会的道義の筈であるのに、それさえなされてないところに今日の福祉・教育行政の根本的問題がみられる。

### “社会的弱者”こそ人間らしい

#### 社会づくりの旗手

ではどうしたらよいか。それには右であげたようなマクドナルド化に乗れない人々が、競争原理の社会から共同原理の社会づくりの方向を導くリーダーとなることが必然になる。社会的弱者や人格発達の敏感期にある者にとって過ごしやすい社会は、すべての人に

とつても過ごしやすい筈だからである。

その場の一つが子育ての共同だといえる。さまざまなお親がいて、子どもがいる。子どもはそもそも、手塩にかけて育てるもので、マクドナルド化にはなじまない。先に述べたような生きにくい生活環境のなかで、子育てが資源が家庭内に少ないときには、多くの場合母だけに子育てが任せられ、途方に暮れることになる。子どもに障害がある場合などはいっそう厳しい状況になる。それだけに、個人的な努力だけでは楽しいはずの子育てが苦しいものになってしまう。

そこで、子育て支援が必要になる。それには、単に当事者の役に立てばよいというレベルではなく、マクドナルド化に乗れないか乗れても乗りたくない人々（老若男女）がかかわって来られるような方向に、そして市町村自体を住民参加の行政へと発展していくように、「社会的弱者（被抑圧者）」が主人公になり、新たな合理化の進行をくい止め人間らしい社会づくりに向けて切り拓く拠点の形成が望まれる。これがこれか

らの子育て支援のあり方ではないかと思う。

そうした、これまでの連載でもみてきたように、あちこちで展開されている市民参加の開かれた支援活動の中に、その可能性が内包されている。

第二回の、市の公園づくり計画に、障害児も安心して利用できる公園にしていくようにと設計の段階から市民がかかわり、公園の目の前に住む障害幼児の発達援助の専門家の申し出で自宅を解放してパークセクターをつくり、地域のつながりが育っていった、札幌のむくどりホームの例もその一つである。

第三回の映画「えんとこ」を市内全保育園で十月から翌年の二月まで五月雨式に市内各地で上映し市民が膝を突き合わせて鑑賞し、全市会議員の心も動かしただという、焼津市の保育園協会と保護者会連合会を中心とする取り組みもその一つである。これは、障害者がボランティアに世話されながら、むしろその青年たちの生き方に勇氣と展望を与えていくという記録映画であるが、感動が町を貫き、いつそう人間らしい街づく

りへの道を切り開いてきている。

第四回は、子どもの育ちをタテにつなぐ保育園・幼稚園の役割について取り上げたが、そこで育った子どもたちが、人間らしさとは何かを自然に学びやがて大人になったときマクドナルド化に組みせず、新たな社会づくりをめざす子育ての共同に参与する主体となるであろうことの可能性が示唆された。

第五回は、市民の運動の中で生まれ二〇年の歴史を持つ東村山市の「幼児相談室」を福祉・医療・教育など、そのたてわり行政を越えて発達を支える連携の先進例としてとりあげたが、そこからは市民の声と専門家と行政の連携が人間らしい街づくりに寄与してきている姿がみられた（馬場教子「東村山幼児教室―親子とともに二〇年―」日本児童学会『児童学研究』第七九巻 二〇〇〇年参照）。

第六回は、相対的に支援される側にある親の声を聞き、やがては支援されてきた人たちが支援者になるという親たちの発達の姿について、事例をもとに学ぶこ

とができた。

以上は連載からのまとめであるが、これはほんの一端に過ぎず、マクドナルド社会のなかで、それと方向を異にするこうした実践は数多くなされている。

成長・発達途上の子どもを正式なスタッフとして採用して子どもの考えを取り入れた行政をしようとしている川崎市の「川崎子ども・夢・共和国」の取り組み（本誌三月号の編集後記参照）もこれにあたる。

以上のように、マクドナルド化に乗れない社会的弱者や子どもの要求に端を発し、決して同情ではなく、多くの人の課題になっていく展望が見え始めている。

誰もが老人にはなるし、いつ障害者にならないともかぎらない。子どもは社会のあすの担い手であり、決して他人ごとではない。同じ社会に生きている以上、生きにくい人の問題は、まさに各自の課題でもある。

このように、「社会的弱者」の課題を自らの課題として対等にかかわる相互支援の輪が大きくなるとき、競争社会ではない老若男女の共同する社会への道に一

歩近付いていけるのではないか。つまりマクドナルド化にとつての「困った人」は、人間らしい社会づくりにとつてはむしろ「先導的な人」なのだといえよう。そこに「支援」の大きな社会的意義がある。

### 子育ての共同を支える専門職の

#### 必要とその養成

子育ての共同は、決して個人的に誰かが誰かを支えるというものではない。公的助成を要求していくことを基本とするが、支援を必要とするものも、単に受け身の存在ではなく、その方向の決定に参画し社会の発展に寄与していくというように、原則としては、長期的見通しの上で、相互支援でありたい。

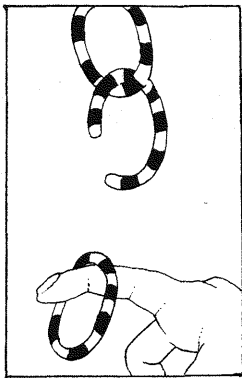
しかし、そうだからといって、支援をすすめる専門職が不要なわけではない。むしろ、参加者たちが主体的に活動していくことができるように、さり気なく支える人がいるかいないかで、子育ての共同の発展の度合いが決まるといっても過言ではない。



第二回のむくどりホームには、核になる人材の存在があった。小出氏の文を引用する。「この場合は障害児の発達や障害児援助について専門知識を持った柴川さんなのであるが、一人の専門知識をもった人材が最初はボランティアであっても、その力と知恵を提供することによって自治体が動き始める。そして、一人では動かせないがその人を取り巻くボランティアの層があれば、不可能も可能になる。柴川実践においては視聴覚について勉強した女性たちの、女性学級のメンバーたちがグループとしてボランティアを担っていることが非常に大きな役割を果たしている。また、そうして動きだしたところに、他の分野の専門知識を持った者たちが、その立場を越えて援助の手を差し伸べてくれることが特徴的である」。

今回の連載には登場してないが、カナダのファミリリーリソースセンター（必ず数人のスタッフがいます）にみるような「ドロップイン」出会いの広場」（小出・伊志嶺・金田共編著『サラダボウルの国・カナ

ダ』ひとなる書房 一九九四年 小出まみ著『地域から生まれる支え合いの子育て』同書房 一九九九年）が、日本においても少しずつではじめた。そうしたところにおいても、数人の専門職の人たちが活躍している。『子育て広場武蔵野市立0123吉祥寺』（柏木・森下共編著 ミネルヴァ書房 一九九七年）では、園長の他に三人のスタッフが活躍している。事業内容の成否はスタッフが決まると考え公募によって慎重に決定したという。個々での活動は、参加した親子が主役であるが、必要なときには相談に乗ったり、黒子となって環境を整えるのがスタッフの大事な役割になる。昨年度より開園の「江東区子ども家庭支援セン



ター」(同センター年報参照)でも同様である。

市民の運動の中でボランティア的にさまざまな子育ての共同の拠点ができていき、公的な場に発展しさらにまた、共同の取り組みが広がるという形で発展していくことにより、人間らしい地域をつくる主体的な場としての意味を持つ。この発展として前述のような施設がこれからもっと増えていくことが望まれる。

では、こうしたスタッフはどこでどう養成されるのがよいのであろうか。さまざまな方面の専門家同士をつなぎ、主人公である親子同士をつなぎ、専門家と親子をつなぎ、そして遠い見通しを持ちつつ、相談に乗ったり、黒子になって、子育ての共同を方向付けていく、役割を担える人材の育成である。

筆者は以前から、「家政学部」あるいは名称を変えて新たに出發した「生活科学部」において、意識的に養成していきるのではないかと考えてきた。

応用科学の学部においては、ほとんどが卒業後の進路が明確(医学部―医者、教育学部―教師、工学部―

エンジニアというように)なのに比して、家政や生活科学系にはそれが無い。そのことが、勢い、「家政学部―主婦」というような誤解を招く要因になってきたのではないか。もちろん、実際には、食物・被服・住居・保育・生活経営学他それぞれの専門を生かし、より高度な専門職についできた卒業生たちは多い。しかし、総合科学としての家政学あるいは生活科学の、総合的で実践的という特長を生かしているとは必ずしも言えない。

人々の子育ても含めた生活の支え手としての社会的専門職は、社会科学のかつ自然科学的視野で生活を科学するとともに、健康な生活のための具体的な手立ても持っている生活の総合的な専門家の進むべき進路の一つなのではないかと考えてきた。

### おわりに

編集部から昨年の今頃、「子育て支援のこれから」をテーマにした連載をと依頼された。

その、私なりの回答は、今回のまとめに述べたように、今日の社会で弱者（被抑圧者）こそが、社会の担い手になっていくとき、近代化の行き詰まりが打開できるのではないかというものである。子育ては社会にとって重要な活動であるにもかかわらず個人的なことのように、親だけに責任を着せられるとき、子育て中の親もまた弱者の位置になる。とりわけ性別役割分業がなくなっていないなかで、多くは女性にその負担がかかっている。多様な層の人々が弱者の立場で子育ての共同に参加し、公共の子育てへの道を追求していくとき、競争社会から共同社会へその原理を変えていき、子育てが楽しいこととなるような、人間的な生活が可能になるのではないか。そのとき、子どもだけでなく、これまで弱者の位置にあった女性も、高齢者も、障害者も、他民族の人たちも生きやすくなり、そしてこれまで、虐げられる立場にあった場合の男性も、マクドナルド化に乗るのではない、その人らしい個性が発揮できるようになるのではないか。これが二十

一世紀への子育て支援の展望ではないかと考える。

最後に、今回は述べ得なかつたが、こうした意味で子育ての共同への担い手として、これからの市民の育成に学校教育ではどんなことを基礎として学習していったらよいのかという問題に触れておきたい。筆者は、これを担う中心が、専門家の育成のためではない保育教育すなわち「国民の普通教育としての保育教育」ではないかと考える。それは、これまで家庭科の保育領域で扱ってきたのであるが、わが子を持つ持たないにかかわらず市民に必要な世代再生産の能力の育成である。それには歴史の方向性を指向しながら「異世代とかかわる力」を育成することが基本だと考えている。この点については、別の機会に展開したいと願っている。

——終——

（静岡大学）